

し直したのだ。「ヒトラーの『我が闘争』を読んだことがあるかどうか」という尋問を受けた彼は、「内容に対する抵抗感」があった、と答えている(72)。そして尋問中には、クルト・フーバーや「白バラ」を引き合いに出して同情してまで、自己弁護したのである(73)。驚くことに、フランスの軍当局はこのすべてを真に受けたのだ。ただの「同調者」と査定されたハイデガーは、また大学名誉教授の座を提示されたが、これを受ければ教える権利もそのまま残されることになる。

フライブルク大学の民主的な新理事たちは異議を申し立てた——多くの若手学者を道に迷わせたこの知的世界の笛吹き男が、甘い処分しか受けないなど、実にふざけた話だと(74)。こうした動きをかぎつけたハイデガーは、名誉教授の地位を確保しようと焦り出す。だが流れが変わり、哲学者カール・ヤスパーズに報告書の作成が依頼されることとなった。かつては誠実な友人同士であったというのに、ナチ時代には、妻がユダヤ人であったがためにハイデガーから黙殺された人物である。ヤスパーズはハイデガーを高く評価していたこともあったが、協力者としてのハイデガーの関与の度合いを少なく見積もることなど、その良心からできなかった。ヤスパーズはこう結論づけている——カール・シュミットやアルフレート・ボイムラーとともに、この三人は「精神面でナチ的な運動の頂点に立とうと試み」たのだと(75)。

最終的に、大学はハイデガーの授業を禁止するほかなかったが、そのまま名誉教授の地位は残されることになった。一時は金銭面でも制裁が課されたが、そのうちこれも解除された。だが自宅に関する限り、他の家族と共有するという不便は強いられた。とはいえ連合国によるハイデガーの扱いは、かつてのユダヤ人同僚らの苦しみ比べれば馬鹿らしいほどに甘いものだった。だがそれでもハイデガーは傷ついたらしく、そのあとしばらくバーデンヴァイラーにあるハウス・バーデン療養所に滞在

し、鬱と闘ったという。ドイツ(国民)の名の下に大量虐殺するという思想にもひるまなかったこの男が、自分の学問的地位が危険にさらされる段となったときには、精神的に追い詰められてやすやすと挫けてしまふのだった。

復調すると、まずは当人が、それからそこへ妻も加わって、支援の手を回り構わず集めようとした——かつてのユダヤ人の教え子やユダヤ人の同僚にまで。結果としてハイデガーは、まったく見込みのなさそうなところからも味方を得て、学术界へのつながりをうまく取り戻すに至った(76)。

一九五〇年、ハンナ・アーレントは戦争終結以来はじめてドイツへ帰国する(77)。彼女は、相反する感情を抱えながらも、マルティン・ハイデガーのもとを訪ねるつもりであった。アーレントの物の考え方に影響を与えた人物ではあるが、ユダヤに身を捧げた彼女としては、彼には反感を抱かざるを得ない。彼女は長らく触れずにいたが、戦後の一九四六年、公刊著作ではじめて彼の名を引き合いに出す。ハイデガーが「彼の恩師にして友人、その教授の地位を彼が引き継いでいたフッサールにたいして、学部への立ち入りを禁じたのは、フッサールがユダヤ人だったからである」と(78)。フッサールを解雇する書類に署名するくらいなら、ハイデガーは辞任した方がよかった、と彼女はたびたび語っている。「そしてこの書簡とこの署名が彼『フッサール』をほとんど死に追いやるどころだったと知っているからには、ハイデガーを潜在的な殺人者だとみなさざるをえないのです」(79)。

二月七日、フライブルクに着いたアーレントはその足でホテルに向かい、そこからメッセージを送った。署名もなかった簡単に「私はここにいます」と(80)。少して、旧ヨーロッパ風の装いで現れたハンナは、ロビーで待つことにする。待ち時間は長いようにも思えた。まもなく、正装に身を包んだ口ひげに白髪交じりの男が、入口に姿を見せる。ハンナは驚いたが、すぐに外面だけは取り繕う

再会を経たアーレントは、その筆致を急激に変えている。(殺人鬼)は去り、その代わり天才が現れた。天才は、過去についてささいな詮索をされて煩わされるべきではないのだ(82)。そのあとハンナは、現代哲学の様相を一変させる計画に手をつける。世界の檜舞台へハイデガーを復権させる手助けをしたのだ。その達成のために、よりにもよって彼女はユダヤ系出版社とのコネを使って、世界中で彼の本が手に入るようにしようとする。次の手紙がその一例である。

ニューヨーク、一九七二年二月二一日

親愛なマルティン

今日は、もしかするとあなたが関心をおもちになるかもしれない出版社のことで、お便りいたします。「…」とりわけ彼「出版者」が執心しているのは全集の出版をなんとか実現させることで、「…」自分はいますぐにでもやりたい、未公開のものすべてを(それがどれほどあるのか彼は知らなかったのですが)ふくめて出版しよう、あなたには一〇万マルクの前金を払うと。「…」

もちろん、あなたがそもそも関心をおもちかどうかとも、「…」わたしにはまったくわかりません。もし関心をおもちでしたら、きつと彼はあなたとお話するためによるこんで参上するでしょう。彼はあなたにお手紙を差しあげたほうがよければ、ひとことそう言ってください、わたしから彼にそれに伝えます。あなたが直接彼に連絡とりたいとお考えなら、彼の住所は1ベルリン六一区リンデン街七六番地、電話は1911(一)「…」おふたりともどうぞお元気で

ハンナ(83)

ハンナに加えて、予想だにしない思想家がもうひとり、ハイデガーの支援を始める。自由フランスのジャン・ポール・サルトルが、自身ナチスの戦争捕虜であったにもかかわらず、すでにハイデガー哲学を自分の思想に取り入れていたのだ。サルトルの大きな後ろ盾もあって、戦後の舞台にハイデガーはしっかりと返り咲くことができた。アーレントとサルトルが力を合わせた結果、ハイデガーの人生に新時代が告げられる。彼はトートナウベルクの山荘に再度引きこもり、また執筆活動を始める。今回は詩と言葉とがテーマだった。「私たちが言葉を話すのではなく、言葉が私たちを話しているのだ」と、謎めいた調子で彼は述べている。言語は、我々と我々の世界、そしてその理解全部を作り出している。サルトルの言葉を後盾に、ハイデガーは「灰のなかから「…」不死鳥のようによみがえった」のだ(84)。

ナチ体制との関与について虚像を伝え、自分の協力がさも重要でなかったかのように見せかけ、罪の最大の証拠でもある著作や演説も細かく改竄・除外し、ハイデガーは無実の難解な哲学者の役を演じた。アーレントやサルトルのほか、世界中の多くの知識人が、その言い訳をうのみにし、その才能を言祝いだ。だがハイデガーは、自分が原因となった危害のことで詫言することも、ヒトラーの犠牲者の苦しみに同情を示すことも、一切なかった。ホロコーストへの意見を求められた彼は、ユダヤの人々の失われた命など戦闘中に殺されたドイツ人と同じ、とばかりに発言し、さらには罪の懺悔を迫る周囲の圧力のなかでも、保守愛国の作家エルンスト・ユンガーを相手に、ヒトラーは自分の名誉を傷つけたと、ハイデガーは愚痴っている。「ヒトラーは私に謝罪すべきじゃないかね？」と逆に問い

返してもいる(85)。

数年後、ハイデガーはトートナウベルクに詩人パウ・ツェラーンを招く。ツェラーンはユダヤ人で、ヒトラー支配下ではゲットに閉じ込められ強制労働に従事させられた上、強制収容所にも抑留されていた。両親ともに強制収容所で亡くなっており、母親が射殺、父親はおそらくチフスによる病死だった。ツェラーンはホロコースト後のトラウマに苦しんでいたが、ハイデガーの招待には何か深い償いの意味でもあるのかと考えていた。そこで一九六七年七月二十五日、彼はその哲学者に面会する。トートナウベルクの来客帳に記録されていたのは、詩人による次の言葉だ。「井戸の上にある外の星を眺めながら、私の胸中に來たるべき言葉への希望に満ちて」。その言葉がやってくることはなかった。この対面のあとまもなく、ツェラーンはセヌエ河に入水し、自ら命を絶った(86)。

そんなことすら、大事ではないかのようにだった。一九五一年、ハイデガーはフライブルク大学に教授として再任される。その後何十年にもわたって、彼は名誉教授として人前に出て、各地へ赴き、学会や研究会に出席し、著作に傾注するなどした(87)。一九五九年九月二十七日にはメスキルヒの名誉市民として顕彰され、一九六〇年五月十日にはドイツでもヨーハン・ペーター・ヘーベル賞を受賞する(88)。正式なナチ党員であった過去など、戦後ドイツのめざましいキャリアを満喫することには、何の障害にもならないかのようにだった(89)。

ナチの哲学者の大半が裁判を回避したとすれば、生き残ったユダヤ人思想家はどうなったのか。無事復職できたのか。国外に出た彼らはドイツへ帰ったのか。

戦争終結までの永遠にも思える時間を持ち続け、生き延びた数少ないユダヤ系ドイツ人哲学者たちは——ドイツ、イスラエル、アメリカ、またはヨーロッパのどこか安全なところなど、居場所はどう

あれ——言葉には表せないほどの安堵を感じていたことだろう。全世界の人々を今にも飲み込まんばかりだったあの力、「千年続くはずのヒトラー帝国」は、ついに潰えた(90)。生き残った人々は祝杯を挙げるが、そのあとすぐに望郷の念に駆られ、ここでいくつかの疑問がその心のなかに生まれる。自分たちは帰れるのか。何を見ることになるのか。どういう気持ちになるのか。

ある哲学者にとっては、帰郷する必要などまったくなかった。そもそも出国していなかったからだ。精神科医にして哲学者のカール・ヤスパースは、かつてハイデガーの友であり、当時もハンナ・アーレントの親友であったが、第三帝国の時代もずっとドイツにとどまっていた。ヤスパースは、ユダヤ人の妻ゲルトルトのため「汚染」されていると、ナチスから指摘されていた。彼はありとあらゆる手を尽くして抵抗し、けっしてナチには屈さなかったため、一九三七年に早期退職を余儀なくされる。もはや哲学部教授という地位は、はつきりと、軍事政策や軍事科学を専攻する教授のものになっていたのだ。ヤスパースは失職したばかりか、一年後の一九三八年にはあらゆる著作の公表が禁止されてしまう。夫妻は、強制収容所送りといういつ終わると知れない脅威を相手に、恐怖が増すばかりの十年間をずっと耐え続けた(91)。戦争が終わりに向かおうとしていたそのとき、ヤスパースの恐れていたことが現実となる。妻の名前が、ゲシュタポの強制移送リストに載ったのだ。ちょうどそこへ、アメリカ軍の到着が間に合ったのである(92)。

一九四五五年のヤスパースは楽観視していた。ドイツは元通りになり、かつてナチであった者は責任に問われるものと思っていたのだ。ハイデルベルク大学復興の責任者のひとりとなった彼は、その立場から、ナチの過去を持つ教授らの復職に反対した。だが、ヒトラーの支配下、存在を脅かされつつも長年生き抜いてきたヤスパースその人も、ナチ哲学者の多くが戻ってきたのを目の当たりにし、そ